

最初からそうすればよかったのだが、ホームセンターに直行して五十メートルまで測れる巻き尺を買ってきた。これで二方向から木までの距離を測り地図に落としていくことにした。しかし、これもやってみると意外と大変なことがわかった。何も障害物がなければ簡単なんだが、木や草が巻き尺をまっすぐに伸ばすのを邪魔するのだ。その都度、後戻りしてできるだけまっすぐに伸ばせるルートを探して計ることになる。それでも、巻き尺は嘘をつかないという信頼感で作業は進んだ。それをまとめて地図に写そうとするとコンパスで描いた円だらけになってどの交点がプロットしたい木の位置なのかわからなくなってしまう紙はどんどん黒くなるばかり。これも最初からそうすればよかったのだが、パソコンの作図ソフトで作業することに変更した。

パソコンの作図ソフトを使うと円の補助線を色分けすることもできるし、補助線と木の位置の印を別の紙(レイヤー)に描いて重ねてみることもできるのだ。作業が格段にしやすくなった。木の位置を地図に落とす作業がかなり進んだ頃、東側から測っていた木と西側から測っていた木が、同じ木なのにずれていることがわかった。どの木を測り間違ったのか、測った誤差が塵も積もって大きくなってしまったのか。実際の木の見え方も参考にしながらチェックして修正を繰り返す作業にずいぶん時間をとってしまった。

どうにかこうにか木の位置を地図に落とし終わってからはまた大変だった。その木が何の木か一本一本調べなければならぬ。そのような知識はまったく無いも同然だったが、樹木図鑑を頼りに調べることにした。これにはずいぶん時間がかかった。なにせ、木の位置を測るのに都合が良いのは、まだ草丈が高くない雪解けの時期なのだが、その時には木に葉が無いのだ。図鑑には木の幹の肌の違いも書かれているが、とてもそれだけではわからない。目につく大きな木は四季をつうじてよく見ていたので、例えばハンノキは特徴的な雌花と雄花で特定できていた。また、ヤチダモはゴツゴツとした大きな冬芽でわかった。春一番にまだ葉が出る前に雄花が咲くバッコヤナギも大ぶりの花から区別がついた。ただ、それ以外の木々についてはせいぜい、紅葉する木があるな程度の認識で、葉の形や、花や実の姿について詳しく観察したことがなかったのだ。なので、木の種類を特定するのは長期戦と構えることにした。

若葉が出る頃になると忙しくなる。原寸大の葉の写真で検索できる樹木図鑑を手に入れてそこらの木の葉と見比べてみたが、それでも「これだ」という確証が持てない。この図鑑は全国の樹木を対象にしているので、ここ北国の樹木まで細かくカバーされていないかったのだ。やはり「北海道」と明記した本でなくてはならない。それでも本に掲載されている写真から、これと同じものだと見分けるのは難しかった。むしろ一九二〇年からほぼ十年がかりで刊行された手書きの絵による樹木図鑑の方が、特徴を捉えて描かれている分、同定の手がかりとしては随分助けられた。そこには、木の様々な部位が季節を超えて描かれており、一枚の絵にその木の全てを捉えようとする意思が感じられた。

